

学 位 論 文 要 旨

氏 名 西岡 美智子

題 目 音声言語と手話による言語指導時の先天性聴覚障害幼児の  
視線に関する研究

学位論文要旨（和文2,000字又は英文1,000語程度）

序章

聴覚に障害があると程度の差こそあれ、聴覚的な情報や音声言語の入力が少なく断片的となる。特に言語習得前に聴覚に障害がある場合には、言語の習得やコミュニケーションに困難が生じるため、早期教育が重要となる。

特別支援学校幼稚部教育要領（文部科学省，2017）には、聴覚障害幼児に対する教育では、保有する聴覚や視覚的な情報などを十分に活用して言葉の習得と概念の形成を図ることが示されている。特別支援学校（聴覚障害）で使用されている視覚的な情報に関する教員を対象とした調査研究によると、幼稚部の名詞指導場面では、絵・写真法が最も多く（王，2012），幼稚部から高等部までのコミュニケーション手段は、聴覚口話と手話付きスピーチが80～90%を占め（小田・原田・牧野，2008），7割以上の教員が絵本をよく指導に用いていた（陳・茂木・鄭，2013）と報告されている。

加えて、特別支援学校教育要領解説総則編（幼稚部）（文部科学省，2018）には、話し手の口形や表情などから視覚的に言葉を受容できる力の育成に努めることが示されており、視覚的な情報には話し手の口形や表情も含まれる。このように聴覚障害幼児の教育の場では、異なる種類の複数の視覚的な情報が音声言語に伴って提示され活用されている。

そこで本論文では、特別支援学校（聴覚障害）で多く使用されている音声言語を伴う絵カード提示、日本語対应手話、絵本の読み聞かせの3つの場面を取り上げ、聴覚障害幼児の話し手の顔と絵や手話などへの視線を測定し、聴覚障害幼児がいずれの領域に関心を持ち、いずれの領域から情報を得ようとしているのかを明らかにすることを目的とした。そして結果から、特別支援学校（聴覚障害）幼稚部における視覚的な情報の提示や活用方法などに示唆を与えることができると考えた。

第1章 絵カード提示場面における幼児の視線（研究1）

研究対象は、特別支援学校（聴覚障害）幼稚部に在籍する聴覚障害以外の障害がみられなかった3，4，5歳児の幼児20名（男12，女8）であった。コミュニケーション手段が

のみの者が12名、手話を伴う者が8名であった。本研究は倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認第12号）。視線測定にはアイトラッカーを用い、測定が可能であった20名を分析対象とした。

親しみのある言葉の単語絵カードと親しみのない言葉の単語絵カードの2種を用い、単語の親近性により幼児の視線停留の仕方に違いが生じるかを明らかにすることを目的とした。結果、親しみのない言葉の単語絵カードの方が親しみのある単語絵カードより絵に頻繁に視線停留し、親しみのない単語の絵への関心が強いことが示唆された。また、絵カードの親近性に関わらず幼児は話し手の口を長く注視し、口形や口の動きから情報を読み取ろうとしていたことが示唆された。

## 第2章 日本語対应手話使用場面における幼児の視線（研究2）

研究方法は研究1と同様である。

日本語対应手話の話し手に対し、幼児のコミュニケーション手段（音声のみ・手話を伴う）により視線停留の仕方に違いが生じるかを明らかにすることを目的とした。結果、コミュニケーション手段に関わらず幼児は話し手の口に頻繁に長く視線停留し、話し手の口に最も関心を持ち、口形や口の動きから情報を読み取ろうとしていたことが示唆された。

## 第3章 絵本の読み聞かせ場面における幼児の視線（研究3）

研究方法は研究1と同様である。

音声言語のみと音声言語に手話を伴う二通りの絵本の読み聞かせを行い、読み聞かせ方により幼児の読み手、絵本の文字や絵、手話の手への視線停留の違いが生じるかを明らかにすることを目的とした。結果、手話なしでは読み手の口、次いで文字に、手話ありでは読み手の目、次いで口を注視し、いずれの読み聞かせ方でも読み手の口から情報の読み取りを行っていることが示唆された。しかし文字と目領域では読み聞かせ方により差があった。手話ありの読み聞かせの方が読み手の表情が誇張されており、このことにより幼児の視線が読み手の目に引きつけられたと推測され、読み手の表情が登場人物の心情などの理解を促すことに繋がると考えられる。また、いずれの読み聞かせ方でも幼児は人物の絵に最も頻繁に視線停留し、主人公である人物の絵への関心が強いことが示唆された。

## 終章

いずれ研究においても、聴覚障害幼児は話し手（読み手）の口形や口の動きから情報の読み取り、口への視線が重要であることが示唆された。また、親しみのない単語絵カードの絵や絵本の主人公である人の絵に強い関心を持つことが示唆された。これらのことから、視覚的な情報や絵本の提示方法として、関心の強かった絵に先に視線を誘導してから話すなど、話し手（読み手）の口と絵のそれぞれに視線を向けて情報を得やすくする工夫が必要と考える。